２０２５/１０/１９　　礼拝メッセージ　　大江 郷子　牧師

主　　題 ： 救いの本質と目的－補足と適用②－
聖書箇所 ： エペソ人への手紙２章１－１０節

先週は「救いの本質と目的－補足と適用－」のイントロのイントロとして語りましたので、きょうは本来ならイントロとしてエペソ２：１－１０から語る予定で、資料を集め準備を始めていたのですが、神様が違うメッセージをするように導いておられるような気がしました。同じ箇所ですが、テーマが違うのではないかと、神様から迫られました。学びのための十分な時間が取れないのではないかという懸念があり、少し抵抗しましたが、神様から示されたテーマに心を決めました。そのテーマはエペソ２：５－６にある「**:5 ……私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです―― :6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。**」のみことばから「キリストとともに」、「キリストと一つにされる」ということです。学びを深めるために、自宅にある書籍を探しましたが、このテーマに関する本は一冊もありませんでした。父と私と二代にわたってコツコツとためた二千冊以上もある書籍の中から見つけることができませんでした。「キリストともに」、「キリストと一つにされる」は、よく聞くテーマですが、一冊もないのです。ほかの牧師にも探してもらいましたがありませんでした。教会図書にも日本語、英語とも、やはり見当たりませんでした。これは一大事だと、なぜこのテーマに関する本がないのだろうと思いました。さっそく勉強を始め、まず三人の著者（ヘンリー・シーセン、ミラード・エリクソン、ウェイン・グルーデム）によるそれぞれの組織神学の本を集めました。またほかの牧師が、神学校時代に組織神学の授業で、このテーマについて学んだことがあり、その時のノートを出してくれました。それらに出てくる聖書箇所を片っ端から読み、調べました。この一週間は、私の人生の中で最も多くの勉強をしたのではないかと思いますが、私にとっては本当にすばらしいものでした。きょうは皆さんにお分かちするのですが、時間の関係もあり、学んだことの十分の一もお伝えできません。私自身ももっと勉強が必要です。内容は、これまで知らなかったことではありません。しかし、きょう皆さんが家路に着かれた時に、「キリストと一つにされる」ということをしっかりと理解し、さらに心に刻まれていることを願い、祈りながら準備をしてきました。まずは、エペソ２章のみことばを読みましょう。

エペソ人への手紙２：１－１０

「:1 あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって、:2 そのころは、それらの罪の中にあってこの世の流れに従い、空中の権威を持つ支配者として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。:3 私たちもみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし、――あなたがたが救われたのは、ただ恵みによるのです―― :6 キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました。:7 それは、あとに来る世々において、このすぐれて豊かな御恵みを、キリスト・イエスにおいて私たちに賜る慈愛によって明らかにお示しになるためでした。:8 あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです。:10 私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。」

１．何故「キリストと一つ」にされる必要があるのか？

まず考えていただきたいのは、**なぜ「キリストと一つにされる」必要があるのか？**ということです。それは、２：１－３に明確に書かれています。つまり私たちは、救われる以前は絶望的な状態であったということです。「**あなたがたは自分の罪過と罪との中に死んでいた者であって**」の「**死んでいた**」は「死体」とも訳せることばが使われています。あなたは死体だったのだと、神の霊的なことに対していっさい反応できない死体だったのです。エゼキエル３７：２には、あなたがたはひどく干からびた骨だったと書いてあります。私たちは絶望的な状態だったのです。アダムの罪によって私たちのうちに罪が入り、神に背を向けて歩み始めた時から、私たちは自分の力ではいっさい救いを得ることができない、いや、神を求めることすらできない者でした。自分の罪を知ることもできず、ましてや罪を悔い改めることもできない者でした。私たちは霊的に完全に死んだ者だったのです。

死んだ状態とは、どのようなものだったのでしょう。一つ目は私たちは「世の価値観に従って歩んでいた」ということです。二つ目はそればかりか「サタンに従って歩んでいた」、そして三つ目に私たちは「肉の欲の中に生きていた」ということです。つまり、私たちが霊的に死んでいる状態であったということは、ただ単に私たちの罪の問題だけではなく、世の流れにも、サタンにも影響を受け、そして私たちの肉のうちがそれを欲し、三つ巴となって私たちは神に背を向け、神に逆らい、霊的なものに目を向けない盲目であったということです。私たちは全く絶望的な状態であるがゆえに、キリストと一つにされなければ、救われることはなかったのです。「キリストと一つにされる」ということは、私たちの救いに非常に大切なことです。

１）世の価値観に従って歩んでいた

「世の価値観に従って歩んでいた」ということですが、２節にある「**この世**」とは何でしょう。さまざまな意味がありますが、ここでの意味は明らかで「神に反抗するもの」、「神を神と思わないもの」、「神を憎むもの」です。ヨハネ１５：１８には「**もし世があなたがたを憎むなら、世はあなたがたよりもわたしを先に憎んだことを知っておきなさい。**」、主イエス・キリストのことばです。この世は、主イエス・キリストを憎むものだった。同じように、主イエス・キリストのことばで、マタイ１２：４５の中に「**邪悪なこの時代**」とあります。エペソ２：２に「**この世の流れに従い**」とありますが、この「**流れ**」は「時」を表すことばが使われています。時間や期間、時代を意味しています。つまり、この世の中がずっと積み重ねてきた、神に背を向け、神に反抗してきたこの世、私たちはこの世の影響を受けてきたと言うことです。永遠のことなどいっさい関係ない、神のことなど考えたくないと。この世も神を求めます。しかしそれは自分の願っている神、自分の願いをかなえてくれる神です。この聖書の神ではありません。

２）サタンに従って歩んでいた

二つ目は「サタンに従って歩んでいた」ということです。サタンも神に反逆するものです。Ⅱコリント４：４に「**その場合、この世の神が不信者の思いをくらませて、神のかたちであるキリストの栄光にかかわる福音の光を輝かせないようにしているのです。**」とあります。「**この世の神**」とはサタンのことです。「**思いをくらませて**」とは、盲目にするということです。目が見えなくなるようにするのです。つまり、サタンはこの世の中にあって、この世の神として、どのようなことをしているのかと言うと、主イエス・キリストを信じていない者が、福音に目を留めないように、彼らの心の目を盲目にしている。そのような影響を与えているのがサタンです。２節に「**空中の権威を持つ支配者**（サタンのこと）**として今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。**」とあります。「**働いている**」というのは、「エネルギー」の語源となっていることばです。「動かす力」とか「その働き」という意味があります。ですから、サタンはそのような力を持っているのです。私たちが福音に目を留めないように力を持って働いているのです。

それだけではなく、２：２に「**今も不従順の子ら**」とありますが、これは私たちのことです。また、この「**子**」を日本語で直訳すると「息子」ということばが使われています。この「息子」は、個人の自由

や選択権が認められている子どもを指します。ですから、私たちが「**不従順の子ら**」と表現されている時に、私たちは自分の自由な意思を持って、選択権を持ってサタンに従い、神に逆らうことを選択していたということです。

３）肉の欲の中に生きていた

３節に「**私たちはみな、かつては不従順の子らの中にあって、自分の肉の欲の中に生き、肉と心の望むままを行い、ほかの人たちと同じように、生まれながら御怒りを受けるべき子らでした。**」とあります。三つ目は私たちは「肉の欲の中に生きていた」のです。この「生きていた」ということばは、ギリシャ語では非常に特殊な表現が使われています。訳せば、その生き方が繰り返し行われていたゆえに、それが私たちの生活になっていたのだと。私たちが世に従い、サタンに従い、自分の肉の欲の中に生きてきたことは、私たちの生活そのものになっていたということです。私たちそのものになっていたのです。私たちは嫌々ながら世に、サタンに従っていたのではなく、私たちの肉そのものが、神に反抗するものであるがゆえに、私たちは喜んで、世とサタンに従っていたのです。ローマ８：７に「**肉の思いは神に対して反抗するものだからです。**」と書いてあります。私たちの肉そのものが、神に反抗するものだったのです。創世記６：１２には「**神が地をご覧になると、実に、それは、堕落していた。すべての肉なるものが、地上でその道をみだしていたからである。**」とあります。私たちは堕落していたのです。

また、３節の「**生まれながら御怒りを受けるべき子らでした**」の「**子ら**」は、２節の「**不従順の子ら**」の「**子**」とは違う単語が使われています。ここでは「親子の親密な関係」を示す時に使われる「**子**」ということばです。「わたしの愛する子」などの時に使います。ですから、私たちの神に逆らう性質は、私たちが生まれてから身につけるものではなく、私たちが生まれる前から私たちのうちにあるものです。親や祖父から代々ずっと受け継いできたものです。ですから、３節に「**生まれながらに**」と書いてあるように、私たちはそのように生まれたのです。詩篇５１：５でダビデは、「**ああ、私は咎ある者として生まれ、罪ある者として母は私をみごもりました。**」と記しています。それであるがゆえに、私たちは世にも、サタンにも従うことに喜びを見いだしていたのです。もう一つだけ付け加えるなら、ローマ１：３２には「**彼らは、そのようなことを行えば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行っているだけでなく、それを行う者に心から同意しているのです。**」とあります。

世とサタンと私たちの肉が三つ巴となり神に反抗しているのです。私たちは自分の力では神を求めることもできないし、罪を知り、罪を悔い改めることもできない。絶望的な状態でした。ただ死んでいるだけでなく、死体だと。ただの死体ではなく、ひどく干からびた骨だった。ですから、私たちが救われる時に神の介入が必要だったのです。神がそこに介在してくださることが必要だったのです。

２．「キリストと一つ」にされるとは、どういう意味か？

１）キリストとともに生かされた

４－５ａ節に「**:4 しかし、あわれみ豊かな神は、私たちを愛してくださったその大きな愛のゆえに、:5 罪過の中に死んでいたこの私たちをキリストとともに生かし**」てくださったとあります。この「**キリストとともに生かし**」ということばは、珍しい単語が使われています。５－６節に出てくる「**ともに生かし**」、「**ともによみがえらせ**」、「**ともにすわらせ**」は、ギリシャ語では一つの単語になっています。この単語は、おそらくパウロの造語なのではないかと言われています。もう一つ、コロサイ２：１３ｂに「**神は、そのようなあなたがたを、キリストとともに生かしてくださいました。**」とあり、この「**ともに生かし**」がエペソ２：５と同じ単語が使われていて、新約聖書にはこの二つしか出てきません。しかし、この「キリストとともに生きる」や「キリストと一つにされる」というのは、新約聖書のありとあらゆるところに散りばめられています。私たちがしっかりと理解しなければならない大切な教えなので、あらゆるところに散りばめられています。ある意味で、「キリストともに」、「キリストが私たちのうちに」、「私たちがキリストのうちに」、「キリストと一つになって」、「キリストを通して」などは神学的用語です。しかし、いろい

ろなところに何百回と出てきます。それだけでなく、その概念もたくさん出てきます。たとえば、「わたしはぶどうの木であなたがたは枝です」、密接につながりを表しています。「イエス・キリストは礎石であり、あなたがたは建物です」、これも同じです。「キリストはかしらであり、あなたがたはキリストのからだです」。欠けたらからだが成り立たないように、密接なつながりを表しています。結婚生活も同じです。私たちはキリストの花嫁です。私たちがいなければ結婚は成り立たない。密接なつながりが、そこに表されています。新約聖書のありとあらゆるところで、私たちは「キリストと一つにされている」という考えが散りばめられています。ミラード・エリクソンという神学者がこのように述べています。「キリストと一つにされるということは、救いの全体を示すことばであり、義認、聖化、栄化などのことばは、救いについての一部分を示しているに過ぎない」と。救いの全体とは何かと言うと、キリストと一つにされることだと。

２：５に「**私たちをキリストとともに生かし**」とあります。この「**ともに**」とは、非常に強い結びつきを表します。ですからパウロは、私たちと神との非常に強い結びつきを示すがために、あらゆるところで教えていると説明しました。Ｉテサロニケ５：１０に「**主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目ざめていても、眠っていても、主とともに生きるためです。**」と書いてあります。また、Ｉコリント１５：４５には「**聖書に『最初の人アダムは生きた者となった』と書いてありますが、最後のアダム**（イエス・キリストのこと）**は生かす御霊となりました**」と書いてあります。主イエス・キリストは私たちを生かしてくださいました。

２）キリストとともによみがえった

６節に「**キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ**」とあります。この「**よみがえらせ**」というのは、もちろん私たちが肉体的によみがえったという話をしているのではありません。「**キリストとともによみがえらせ**」とは何を表しているのかと言うと、キリストは十字架で死なれて葬られた後に、肉体的によみがえられましたが、私たちはキリストとともにあって、霊的によみがえったということです。キリストがよみがえったということは、まずキリストが死んだことを指しているように、もし私たちが、キリストとともによみがえったのであれば、私たちもキリストともに死んだはずだということです。パウロは、エペソ２章では、私たちが罪過と罪との中に（霊的に）死んでいたということを強調したかったので触れていませんが、ローマ６：６－７で語っています。「**:6 私たちの古い人がキリストとともに十字架につけられたのは、罪のからだが滅びて、私たちがもはやこれからは罪の奴隷でなくなるためであることを、私たちは知っています。死んでしまった者は、罪から解放されているのです。**」と。ここで大切なことは、私たちの古い人、つまり罪過と罪との中に死んでいた私たちの古い性質は、キリストとともに十字架にかけられて死んだのだということです。主イエス・キリストは肉体的に死なれましたが、私たちの古い性質が霊的にキリストとともに十字架で死んだということです。だからこそ主イエス・キリストが肉体的によみがえられた時に、私たちは主イエス・キリストとともに霊的によみがえったのです。新しい霊的ないのちを与えられたのです。そして、主イエス・キリストが天に上げられた時に、私たちも霊的に天に上げられたのです。ローマ６：４で「**私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。**」とあります。私たちの古い性質はキリストとともに死んだのです。ここで「**キリストの死にあずかるバプテスマ**」と言っていますが、これは私たちが「バプテスマ」と聞いて思い浮かべる洗礼槽に浸される儀式的なものを指してはいません。これは、主イエス・キリストの十字架の死を意味しています。この当時の人々にとって「バプテスマ」ということばは、私たちとは違う印象を持っていました。少し、暴力的な意味が含まれていたのです。「浸す」と言うよりは、「どっぷりと沈める」というものです。ですから「人が溺死する」や「船が沈没する」といった時にも、この「バプテスマ」ということばが使われるので、暴力的な意味があるということです。マルコ

１０：３８で主イエス・キリストが「**あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。**」と言った時に、この「**バプテスマ**」は死を意味しているのです。この箇所は弟子たちが、だれがイエス様の右や左にすわるかということで言い争っていた場面で、イエス様が弟子たちに語られたことばです。この時、弟子たちは「できます」と簡単に答えていますが、私たちは、後に彼らがキリストと一つになった時に、キリストと運命をともにし、キリストの死にまであずかっていったこと、殉教していったことを聖書を通して知っています。ですから「キリストと一つになる」ということは、キリストが迫害されたように私たちも迫害を受け、キリストが死なれたように私たちも死ぬことをも含まれるということです。

３）キリストとともに天にすわらされた

三つ目は、私たちは「キリストとともに天にすわらされた」ということです。どこにすわらされたのでしょう。私たちは今どこにいますか？ここにすわっています。しかし私たちは、キリストとともに死に、キリストとともによみがえり、キリストとともに天に上げられて、霊的にはキリストとともに天にすわらされていると言うのです。キリストは今どこにおられますか？コロサイ３：１にはこのように記されています。「**こういうわけで、もしあなたがたが、キリストとともによみがえらされたのなら、上にあるものを求めなさい。そこにはキリストが、神の右に座を占めておられます。**」と。私たちはキリストと一つにされました。そのキリストはどこにすわられていますか。神の右の座にすわられています。では、私たちは天でどこにすわっていますか。神の右の座です。私たちは今、霊的に、立場として、神の右の座にすわっているのです。そして今、この地上でキリストとともに生きているのです。私たちのような罪深い人間が、神の右の座にすわっているなんて、その考え方はおかしくないのか、言い過ぎではないのかと思われるかもしれません。しかし、聖書がそのように言っているのです。私たちはキリストと一つにされたがゆえに、私たちは今、キリストとともに神の右の座にすわっているのです。信じ難い真理です。神に背を向け、この世とサタンの流れに従って、肉の欲のまま生きていた私たちが、キリストとともに死に、キリストとともによみがえらされたことによって、キリストと一つにされて、今私たちは天において神の右の座にすわっているのです。ですから「キリストと一つにされる」ということは、子どもたちに「神様はいつも一緒にいてくださるから、どこにいても怖くないですね」と優しく語るようなレベルの話ではありません。私たちは、キリストとガッツリと一つにされて、神の右の座にすわらされているのです。測り知れない神の恵みがそこに書いてあります。

それだけではなく、コロサイ３：４には「**私たちのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに、栄光のうちに現れます。**」と、キリストとともに私たちが神の栄光のうちに現れるのです。これはいつのことを話しているかと言うと、私たちの信じる終末論によれば「地上再臨」のことです。主イエス・キリストは、私たちと一緒でなければ、地上再臨されないと言われているのです。なぜでしょう。キリストが私たちと一つにされているからです。私たちとともにでなければ、神様は、主イエス・キリストを地上再臨されないと。私たちを必ず伴って行くのだと言われているのです。さらに言及すると、神である主イエス・キリストは完全なお方ですが、ご自身の十字架によって、主イエス・キリストが私たちと一つにされたことによって、その状態が完全な状態になったのです。

たとえば、一つの粘土のかたまりからごっそり何かをかき取ったら、もうそれが一つではなくなるように、私たち抜きではキリストは完全ではあり得なくなったと言うことです。信じられますか？完全である神が、私たち抜きでは完全ではなくなるような方法を神様が選択されたのです。「キリストと一つにされた」とはそういうことなのです。「神様、とんでもないことです」などと言うことではないのです。そのために主は十字架にかかられ、そのために私たちの古いものは十字架の上で死に、キリストとともによみがえって、今キリストと一つにされたのです。神の右の座におり、神とがっちりと結ばれているがゆえに、私たちを含めて完全であるとされたのです。私たちがキリストのからだである時に、キ

リストの頭だけがあってはおかしいでしょう。頭だけで歩いていたらおかしいでしょう。片腕がなければ完全ではないのです。私たちを含めて神様はキリストと一つとされました。結婚生活に花嫁が必要であるように、キリストが夫であり、私たちが花嫁であるというのは、そういうことを神様は表しているのです。私たちはキリストと一つにされたという強い結びつきは、神様が選ばれたものなのです。壮大な真理です。偉大な約束と保証です。測り知れない恵みです。どうしてこのテーマの本が一冊もないのだろう、どうしてこのテーマについて強調されて教えてこられなかったのだろうと不思議です。私たちの救い全体を表すことです。ですから私たちはキリストと一つにされ、キリストとともに歩み、私たちは立場として天にあるのだということを常に覚えておかなければいけないのです。そしてやがて神の栄光のうちに現れるキリストとともに、神の栄光のうちに私たちも現れるのだと。そう考えると、私たちに与えられている祝福は、私たちの理解をはるかに越えたものであることがわかります。

パウロはこのように祈っています。エペソ３：１８－１９ａで「**:18 すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、:19 人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。**」と。キリストが与えてくださった祝福というのは、私たちの理解をはるかに越えるがゆえに、私たちの頭をフリーズさせるほど偉大なものなのです。測り知れないものなのです。私たちが新しく生まれ、キリストと一つにされ、キリストともに歩む時に、私たちはどうしてこのようなこの世が求めるつまらないものに心が惹かれてしまうのでしょう。なぜそのようなものに価値を見いだそうとしているのでしょう。なぜそのようなものに満足を求めるのでしょう。それよりもキリストが与えてくださる満足に目を留め、追い求めないのでしょう。

３．「キリストと一つ」にされることは、どのような結果をもたらすのか？

「キリストと一つ」にされることは、どのような結果をもたらすのか？いろいろがありますが、今回は時間の関係上、エペソ２章のテキストに沿って、皆さんとともに考えていきましょう。１０節を見ると「**私たちは神の作品であって、良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行いに歩むように、その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです。**」とあります。「**良い行いをするためにキリスト・イエスにあって造られた**」と。キリストと一つにされることによって、私たちは新しく造られたのです。この「**造られた**」は、新約聖書では２回、ローマ１：２０とここにしか出てこないことばです。「**神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。**」、この「**被造物**」が「**造られた**」と同じことばが使われています。ローマ書の「**被造物**」は、実際に肉体が造られたという意味ですが、エペソの「**造られた**」は何かと言うと、霊的に新しく「再創造された」ということです。私たちは霊的に再創造され、新しく生まれ変わったのです。Ⅱコリント５：１７に「**だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。**」と。これも同じことを指しています。霊的に新しくされたのです。「**だれでもキリストのうちにあるなら**」です。キリストと一つにされた者ならば、あなたがたは「**新しく造られた者です**」。キリスト・イエスにあって、私たちは再創造されたのです。

ガラテヤ６：１４－１５にはこのように記されています。「**:14 しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが決してあってはなりません。この十字架によって、世界は私に対して十字架につけられ、私も世界に対して十字架につけられたのです。:15 割礼を受けているか受けていないかは、大事なことではありません。大事なのは新しい創造です。**」と。ユダヤ人なのか、ユダヤ人ではないのかは関係ない。大事なのは「**新しい創造**」なのだと。ここで「**世界は私に対して十字架につけられ**」とありますが、つまり、世はもう私に対して影響をもたらさなくなったのです。「**私も世界に対して十字架につけられたのです**」、私も世に引き寄せられなくなった、世に興味を示さなくなったのだと。なぜなら私たちは新しく生まれ変わり、全く別のものになり、キリストと一つにされたからです。全く新しい価値観を与えら

れたのだと。この世の価値で生きていた者が、キリストの価値で生きる者になったのです。サタンに従って歩んでいた者が、キリストに従って歩む者になったのです。肉を満足させることが喜びだったのが、主イエス・キリストを満足させ、主の栄光を現わすことが私たちにとって喜びであり、満足となったのです。全く新しいものに変えられたということです。逆に言えば、私たちはキリストと一つにならなければ、新しく生まれなければ、神の栄光を現わすことは決してできません。キリストと一つにならなければ、私たちは神のうちに喜びを見いだすことはできないのです。キリストと一つにならなければ、私たちは神にのみ満足を見出す歩みをすることはできないのです。私たちはキリストと一つにされているから、神に拠り頼んで、神のみに信頼を置いて生きて行くのです。

エペソ２：１０に「**良い行いに歩むように**」とありますが、ここに出てくる「**歩むように**」ということばは、これより以前では、２：２の「**今も不従順の子らの中に働いている霊に従って、歩んでいました。**」にしか出てきません。パウロは明らかに意図的に、２：２の世とサタンに従って肉の欲のままに歩んでいる歩みと、２：１０の新しい歩みとを明らかに対照的に語っています。つまり私たちは、キリストと一つにされたことによって、新しい歩みを始めるようになったのです。キリストに似た歩みを始めていくのです。それが私たちにとって喜びとなり、それが私たちにとって願いとなり、キリストとともに歩むことが私たちにとって四六時中の関心事になったのです。ですから私たちはみことばを読み、祈るのです。先週もお話ししましたが、みことばを読んでいるから救われているのではありません。祈っているから、伝道しているから救われているのではありません。私たちは本当に、いつも神の栄光を求めながら飲み食いしているのでしょうか。私の答えは「はい」です。以前は自分の健康のためにと気遣って飲み食いしていました。しかし今はなぜ飲み食いの時に神の栄光を考えるのかと言うと、神様が許されるならば、神が与えてくださったこのからだを健康に維持し、神様が許されるまでこの地上で神の栄光を現わしたいと願うからです。そのために自分のすべてのものに注意を払うのです。外側から見れば同じことかもしれませんが、内側を見れば方向が全く違います。自分のためにしていることなのか、神の栄光のためにしているのかです。パウロが言うように、願わくば、私も早く死んでキリストに直接お会いしたいです。しかし神様がせよと言われるのであれば、このいのちが続く限り神の栄光を現わして歩んでいきたいです。私が健康で生きるのか、病気になるのかは、私にとっては大きな問題ではないのです。神が病気にされて、病院に行けと言われるなら、私は喜んで入院します。なぜならそこで神様が栄光が現すように定めておられるからです。貧しいか、豊かかも関係ないです。貧しさや豊かさを通して神の栄光を現すことが私たちの目的です。私たちが何に本当に信頼を置いているのかということをそこで現すことができるからです。問題が起きるか、起きないかも問題ではありません。その問題を通して、私たちがどのように神に信頼し、歩んで行くかを通して神の栄光を現わしていくのです。私たちは全く新しい価値観で、全く新しいもので、全く新しい世界に置かれているのです。神に背を向けて歩んでいた私たちが、キリストと一つにされたのです。神を憎んでいた私たちが、新しいものとなってキリストを喜ぶ者に変えられたのです。良い服、車、家、社会的地位など、自分の願いをかなえるのが人生だった者が、神が喜ばれることが私たちの満足であり、神が喜ばれるのを見て私たちも喜ぶのです。また神ご自身も私たちが神を喜びとしていることをご覧になり、私たちを喜んでくださるのです。

この真理は、救われている者にしかわからないものです。ヨハネ８章で、イエス・キリストがユダヤ人の指導者たちに、「あなたの父はサタン（悪魔）でしょう。だからわたしが語っていることがわかりません」と。「あなたの目は盲目でしょう。だからわたしの言うことに聞き従わないのです」と言われました。「わたしの羊はわたしの声に耳を傾け、わたしの声に聞き従う」と言われました。

エペソ２：１０に戻り、「**その良い行いをもあらかじめ備えてくださったのです**」とありますが、「**あらかじめ備えられた**」とはいつ備えられたのでしょう。「**世界の基の置かれる前から**」です。エペソ１：４にあります。キリスト・イエスにあって良い行いをするために、私たちはあらかじめ、世界の基の置かれる前

から備えられていたのです。私たちの頭はパンクしますよね。どういうことかわかりますか？私たちが造られる以前、木や草が創造される以前、世界の基が置かれる以前、神が時間や空間の概念をも創造される以前、何もない時に、永遠の前から、ひとりひとりの名前もご存じで、あなたがいつ生まれ、いつ救われるかも神はすべて計画されていて、あなたがたがキリストと一つにされることも定められていたのです。すばらしい壮大な真理がここにあります。永遠の昔から、私たちがキリストと一つにされることを神様が計画されていたのです。そしてそのように私たちを導いてくださり、一つとされました。

私がこの学びをしている時に、一つの場面が思い出されました。新しいものに変えられたのに、古い歩みが恋しくなるということです。先週もお話ししましたが、エジプトの奴隷であったイスラエルの民は、そこから救い出されて神の奴隷となったのに、エジプトにいれば肉が食べられたのにとつぶやきました。また、自分たちすべてが入れる墓がないからと、この荒野を墓にするためにここまで私たちを連れて来たのかと、モーセに対して文句を言いました。また、約束の地を目の前にした時に、そこに大きなからだをした部族が住んでいることを知った彼らは何と言いましたか。ヨシュアを殺して帰ろうと言ったのです。エジプトの奴隷に戻ろうと言ったのです。そこで世を求めるということは、完全に殺されて、完全に死に、葬られた自分の古いからだを、行って、掘り返して、腐って悪臭を放っているそのからだを抱きしめるようなものだということです。もし私が救われているのなら、私はそこに主イエス・キリストも一緒に連れて行くことになるのだということです。ですから、私たちはいったい何に願いを置き、何に希望を置き、何に時間を使い、何にお金を使い、何に満足を求めているのか――。キリストと一つにされた者として、私たちは吟味しなければいけません。しかし感謝なことは、皆さんもご存じのとおり、これはすべて１００％、神の恵みによってなされているということです。

また、２：１０に「**私たちは神の作品であって**」とあります。この「**作品**」とは「傑作品」や「芸術品」とも訳せることばです。王の冠を作る職人が、金や宝石を使って、丹念に設計図を書き、丹念に丹念に作り上げた芸術作品とも言える王冠を指すのがこの単語です。私たちは神の傑作品なのだと。私たちは罪が赦されただけではなく、キリストとともによみがえらされ、私たちはキリストと一つにされたのです。キリストが私たちを含めて完全であると定められた。すばらしい真理がそこにあります。それによって、私たちは新しい歩みをなしていくことができるのです。私たちの力ではありません。では、どうしていくのですか？私たちは常に常に主イエス・キリストのことを考えるのです。みことばを読むのです。祈るのです。心の中はいつも神様のことでいっぱいです。ダビデのように、夜寝る時も、朝起きる時も主のことを考えるのです。神様が夢の中に出てくることはありませんか。時には夢の中で罪が示され、起きて悔い改めの祈りをするようなこともあります。これらは当然のことです。四六時中、神様のことを考え、みことばを学んで読んでいく時に、私たちの心の中はみことばと神様のことで満たされるのです。またこの後学んでいきますが、神様はみことばを通して私たちに働かれます。

キリストと一つにされた私の関心事はキリストだけです。しかし、それは努力して得たものではありません。神がそのように私たちを傑作品として変えてくださったのです。この一週間、キリストと一つにされたということを、いつも心に覚えながら歩んでくだされば と思います。